「小論文」入試問題中の資料文につきましては、著作者から本ページ掲載に限定して許諾をいただいたうえで掲載しております。

この資料部分を他へ掲載、引用等されようとする場合には、著作者から別途許諾を得ていただく必要がありますことを申し添えます。

2007年度前期日程入試問題　小論文試験

問題

下記の資料文を読み、資料文の模倣や反復をできるだけ避けつつ、その内容への賛成論および反対論を解答用紙の指定の欄にそれぞれ字数４００字～５００字で記しなさい。

**資料文**

市場原理経済とは論理が情緒の上位に立つというものである。情緒を徹底的に排斥し論理を徹底的に貫くというものである。だから従業員の情緒を無視したうえで会社とは株式となる。株主中心主義である。経営者と社員との間に情緒はなく、そこにあるのは雇用関係という論理だけだから、論理さえ整えば経営者は自由にリストラすることができる。そうして利益を上げないと、会社は株主のものだから経営者が追い出されてしまう。リストラするための論理として成果主義を取り入れる。

一方、利益を上げるため、正社員を減らしパートやアルバイト、さらには派遣社員や請負社員など非正社員を雇うようになる。これら非正社員の数はいまや雇用者全体の三分の一にまで膨らんでいる。非正社員の賃金は正社員に比べ時間当たり半分以下だし、非正社員に対して会社は社会保険料の負担も不要だから、人件費削減の切り札となっている。古くからの「雇用」という概念が急激に破壊されている。成果主義も人件費削減のかくれみのとなっている。秀でた社員の給料は上がるが、大多数を占める普通の社員の給料はむしろ減少する、というのが実態といわれる。会社は、経営者従業員もろとも、株主という怪物に一挙手一投足を監視された檻と化している。情緒を排し、論理を貫くと会社はこうなるのである。

このような会社に勤めたいと思う若者は当然減少し、フリーターといわれる若者が増える。数百万といわれる彼らが非正社員のかなりを占めているが、彼らがその努力を報いられることはほとんどない。職業能力を蓄積するチャンスもない。希望もなく漂流することになる。ニートと呼ばれる、学生でもなく、職業訓練にも参加しない無職の若者が五十万人を超えた。彼らはこのような社会に幻滅し、勤労意欲を失ったり、企業が先述のように正社員の新規採用を絞ったため、就職できずあきらめてしまったりした者たちである。

フリーターもニートも増加中である。天然資源のない我が国で唯一の資源ともいえる人材が、数百万の単位で力を発揮すべき場すら与えられていない、というのは大問題であろ

う。

政府は無論事態に気づき対策をとり始めている。労働力の減少による経済成長率の低下が懸念されるばかりではない。将来彼らが税金を払えないどころか、生活保護を受けるようになることも想定され、財政悪化の公算も大きいからである。そのために八百億円ほどの予算を用い、働く意欲を向上させるための取り組みを発足させようとしている。最近なされた他のほとんどの政策と同様、対症療法であり、効果は期待できそうもない。

リストラや非正社員の増加により企業の収益構造は改善されているようだ。しかしそれは多くの失業者、フリーター、ニートなど半失業者の群を生み出したうえでの繁栄である。このままこの傾向が続くと、たとえほとんどの企業が栄えても、国民全体としては豊かにならない、という現象が顕著になるだろう。すると必然的に消費の減退が起き、企業業績も低下する。生活保護者が増えれば税収が減るうえに救済のための予算も必要だから、税率も上がらざるをえない。景気はさらに冷える。長い目で見ると、現状の如き雇用破壊による企業の好業績は、ほんのつかの間のものであり、やがては全面的に沈むことになる。

この議論を図式化すると、市場原理や株主至上主義→リストラや非正社員への依存→失業者、フリーターやニートの増加→消費の減退や税収の不足→経済の衰退、となる。

局所的に正しくとも大局的には誤りとなる好例である。短期的には効果があるように見えても、長期的には悪いという好例である。

市場経済の影響は経済にとどまらない。フリーターやニートばかりでなく若い世代全体に及んでいる。学校を卒業しても正社員となるのはむずかしい。正社員となっても成果主義に追い立てられ、リストラにおびえなければならない。これでは一生懸命勉強をして、良い大学に入り、良い会社に入り、安定した収入を得よう、という動機も低下する。真面目に勉強してコツコツ働くより、ホリエモンに代表されるＩＴ長者のようにベンチャーを作り虚業に精を出したほうがよほど旨味があると思うだろう。学力低下にはいくつかの要因があるが一つはここにある。日本経済は世界一良質といわれた労働力に支えられ発展した。子供の学力が低下すれば日本経済は壊滅する。

市場経済による生き馬の目を抜くような社会を見て、若い夫婦のなかには、子供を産み苦労して育てても、こんなに辛い世のなかが待っているのなら子供が可哀そう、と考える者も多くいるだろう。出産育児などに精力を割いていては成果主義の下で生き残れないだろう、と考える働く女性も多くいるだろう。少子化が進むことになる。出産を無料にしたり、子育てに対して資金援助をしたりする動きもある。またしても対症療法でたいした効果は出まい。打算だけを原動力とした、血も涙もない社会のほうがはるかに大きな理由だからである。子供が幸せになれるような社会なら、若い夫婦も負担は大きくとも産み育てようと思うだろう。このような状況こそが社会の閉塞感を生んでいる。ホリエモンを閉塞感打破のヒーローとして無邪気に喝采した若者たちは、ホリエモンを生み出した市場原理主義こそが、この閉塞感の元凶であることに気づいていない。無数の虚業家は、市場原理という河に必然的に発生するあぶくなのである。

市場原理とは自由競争であり、規制緩和が不可欠である。規制とは自由の暴走を抑え、正義と弱者を守るためのものである。規制をなくせばどうなるかは、経済以外を考えればわかりやすい。ボクシングで、グラブ着用や後頭部攻撃禁止といった規制をはずせば、すべての試合はノックアウトで終わるだろう。判定勝ちという曖昧はない。十試合に一人は死人が出るだろう。経済でも規制をはずすと、国民は勝ち馬と負け馬に二分され、普通の人々は存在しないという状態に収束する。それを人々は本能的に感じているから、自衛のために勝ち馬に乗れとなるのである。

これにより、かろうじて残っている日本の誇る美しい情緒や武士道精神に由来する形は傷ついている。さらには市場原理の副産物である金銭至上主義が跋扈（ばっこ）している。金こそすべて、という主義である。十六世紀なかばに来日したフランシスコ・ザビエルは「日本人は貧しいことを恥ずかしがらない。武士は町人より貧しいのに尊敬されている」と驚いた。最近、江戸が欧米の歴史学者に注目されているが、彼らがもっとも印象づけられるのはやはり、ヨーロッパの支配階層であった貴族と異なり、武士は金がないのに尊敬されていたということらしい。武士は刀を持っていたから尊敬されていたわけではない。高い倫理道徳ゆえである。日本ほど金銭至上主義と縁遠い国は、少なくとも欧米にはなかったと思う。

市場原理主義は経済に限っても誤りである。それにとどまらない。市場原理に発生する「勝ち馬に乗れ」や金銭至上主義は、信念を貫くことの尊さを粉砕し卑怯を憎む精神や惻隠の情などを吹き飛ばしつつある。人間の価値基準や行動基準までも変えつつある。人類の築いてきた、文化、伝統、道徳、倫理などをも毀損しつつある。人々が穏やかな気持で生活することを困難にしている。市場原理主義は経済的誤りというのをはるかに越え、人類を不幸にするという点で歴史的誤りでもある。苦難の歴史を経て曲がりなりにも成長してきた人類への挑戦でもある。これに制動をかけることは焦眉の急である。

（出典：藤原正彦『この国のけじめ』２９～３３頁、文藝春秋、２００６年。原文は縦書きである。）

＜出題意図＞

民間部門にとどまらず公的部門でも、また経済にとどまらずそのほかの分野でも、市場原理が程度の差はあれ進展しつつある。市場原理主義には規制緩和・自由競争・実力（能力）発揮などの側面で長所のあることもいわれているが、他方、格差社会の出現などその弊害面も指摘されている。この資料文は、市場原理主義が経済のみでなく従来の文化・伝統等を破壊することなどの弊害があるため、これを「制動」すべきことを指摘する。

＜採点評価のポイント＞

資料文の指摘について賛成論・反対論のいずれの主張を展開する場合でも、主題に関する理解度、主張の論理的構成と統一性、主張の説得力、表現力に重点をおいて評価するものとする。

2007年度後期日程入試問題　小論文試験

問題

子どもや若い人たちを育てるときに、ほめてやれば子どもも若者も伸びていくとして、少しでもいいところを見つけてほめることが大事であるという考え方と、そのようなやり方は長期的に見れば結局子どもや若者をだめにしてしまいかねない育て方だという考え方とが対立する。下記の資料文を読み、資料文の模倣や反復をできるだけ避けつつ、その内容への賛成論および反対論を解答用紙の指定の欄にそれぞれ字数400字～500字で記しなさい。

**資料文**

ここで、「ほめる教育」のもうひとつの弊害を指摘しておかなければなりません。子どものコミュニケーションのあり方に影響して、率直でない方向へとゆがめてしまう可能性があることです。

人と人の関係はさまざまなコミュニケーションで成り立っていますが、子どもたちがどのようなコミュニケーション習慣を身につけるかには、大人のコミュニケーションのあり方が大きく影響します。一般に、子どもは、人とどうかかわるかという社会行動の習慣を、まわりの大人たちの社会行動をモデルにして学習するからです。

例えば、話す―聞くというコミュニケーションの基本行動についてもそうです。家庭で、親がしゃべるばかりで子どもの話をきちんと聞かない。あるいは、親どうしのやり取りでも、どちらもしゃべるばかりで相手の話をきちんと聞かない。こういう親を見て育つと、子どもも人の話をちゃんと聞かない、聞けない人間になってしまう可能性が高くなります。親のコミュニケーション行動をモデルに、人とのコミュニケーションにおいては話すことが大事なのであって聞くことは大事でないと、生の経験から学習してしまうからです。

さて、コミュニケーションという面から見ると、「ほめる教育」で育てられた子どもはなにを身につけるか？

自然にほめる場合との対比からわかるように、「ほめる教育」で大人が子どもにたいしてとるコミュニケーションのあり方は特殊なものです。ありのままの気持ちや考えを率直に伝えようとするものではなく、つねにすこしでもいいところを見つけてほめてやろうという意図をもったコミュニケーションのとり方です。このようなコミュニケーションのとり方に日常的に接していると、子どももそういったコミュニケーションのとり方を身につける可能性が高くなります。

わたしたちの生活のさまざまな場面においては、意図的なコミュニケーションが必要とされることもあります。相手を傷つけないよう、本心はいわないでおいたほうがいいなどという場合がそうです。あるいは、仕事上の交渉や政治的な駆け引きなどでは、ただ率直なだけではすまないということもすくなくありません。

しかし、人間のコミュニケーションの基本は、やはりおたがいの気持ちや考えを率直に伝えあうことにあります。とくに家族や友だちといった親密な関係では、この率直なコミュニケーションがなによりも大事です。仕事や政治の場面にしたって、本当に大事なのは率直なコミュニケーションです。

ですから、子どもがまず身につけるべきなのは、率直なコミュニケーションのとり方です。それ以外のコミュニケーションのスタイルは、これをきちんとできるようになってから学べばいいのです。

ところが、親をはじめとするまわりの大人が子どもにたいしてつねに意図的なコミュニケーションで接していたなら、子どももそれをごくあたりまえのコミュニケーションのあり方として身につけてしまいやすいのです。そして、家族や友だちとも率直なコミュニケーションをとれなくなる可能性だってあります。

実際例をあげておきましょう。大学のゼミの研究会でのことです。ゼミに所属する学生たちが、各自の研究について検討する定例の研究会です。各学生がまず自分の研究について発表し、それについてディスカッションしていきます。

新入りの三年目の学生が研究計画について発表したときのことです。発表のあと、他の学生たちに発言をうながすと、四年目のある学生が「なかなかおもしろそうな研究計画でいいと思います」というのです。

研究会という知的コミュニケーションの場で求められるのは、なによりも研究内容に関する質問や意見です。疑問や考えを率直に交換して、研究内容にたいする認識を深める。そして、その意義や問題点を明らかにするのです。

ところがその四年目の学生は、下級生の発表にほめ言葉をあたえただけで終わり。そのあとに発表内容の具体的な点についての率直な質問や意見が続くでもなく、ほめ言葉をあたえただけでおしまいなのです。子どものころから「ほめる教育」にさらされてきたために身についてしまった習慣としか考えられません。

学生と接していると、近年、この種のことが目立つようになってきました。このような研究会や授業でのディスカッション場面で、率直な意見の交換ということが成り立ちにくくなっているのです。そして、相手の気持ちをおもんぱかってのお世辞的ほめ言葉がしばしば発せられるのです。これでは、議論もなかなか深まりません。「ほめる教育」は、こんなところにも影を落としているのです。

すこしでもいいところを見つけてほめてやろう ――。「ほめる教育」のこの姿勢が、子どもたちのコミュニケーション行動にひずみをあたえているとしたらゆゆしいことです。

（出典：伊藤進『ほめるな』９０頁以下、講談社現代新書、2005年。原文は縦書きである。なお、原文中のふり仮名は省略した。）

＜出題意図＞

① 課題文は、子どもや若い人たちを育てるときに、ほめてやれば子どもも若者も伸びていくとして、少しでもいいところを見つけてほめることが大事であるという考え方に対して一定の批判を展開するものである。

② 小論文の課題は、資料文の内容に対して賛成論と反対論の二つの小論文を作成することである。資料文の見解が拠って立つ論拠を的確に把握し、それを出発点に賛成論を展開するとともに、賛成論とは異なる考え方にも思考をめぐらせ、その論拠を整理し、反対の立場からの立論をも論理的に展開することができる能力を身につけているか、を問う出題である。

＜採点評価のポイント＞

資料文の指摘について賛成論・反対論のいずれの主張を展開する場合でも、主題に関する理解度、主張の論理的構成と統一性、主張の説得力、表現力に重点をおいて評価するものとする。